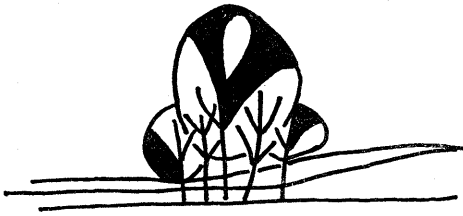


子供とのかかわり

折原祥子



保育者として子供達と毎日生活していく中で、はたして「これで良いのか？」という疑問はいつも持っている。

本当に、一度位は自信を持って保育してみたいと思うのだが、全くだめで、これからも見込みがないだろうと思っている。

そこで立派な保育者になろうとは思わず、自分の好きなものを楽しみながら、ゆったりした気持ちでいられる様に、又幅の広い物の見方が出来るように努力して、子供の前にいたいと思っ

ただ、出来るだけ多くのものに興味を示せる人間でいたいし、何かに夢中になっていられる人間でもありたいと思う。何をやっていても、保育の道に役立つように思うし、どのようなものでも、根本的に大切なものは共通しているのではないだろうか。子供達ひとりひとりの個性を―自主性を―創造性を育てる保育と、良く耳にする言葉であるが、何と難しいことか。そこで、自分がどうあるべきか考えながら、子供達ひとりひとりのかかわりを大切にして行きたいと思っている。

このかかわりと云うのも、意図的に出来る場合より、思いがけない場合にあらわれる事が多い。これは、家庭でも云えることではないだろうか。ああしよう、こうしようと思っても出来ない事が多く、生活そのものの積み重ねの中で生まれていく事が多い。

夏休みに一ヶ月間、アメリカの家庭で過す機会があった。二歳十ヶ月になる男の子ベンジャミンと、一歳六ヶ月の女の子ニコールと云う二人の年子がいた。

私はこの子供達と毎日、お化けごっこやカウボーイごっこなどの遊びをしながら、結構楽しく過したのであるが、この子供達と両親、特に父親とのかかわり方を見ながら、幼稚園以前の子供の生活を知り、考えさせられる事も多かったのである。

両親は、特別に今どういふ教育をしようなどと構えた姿勢はなかったが、とにかく子供と良く遊ぶ。日本と違い、夕方には家に帰り、食事を一緒にし、お風呂に子供と入り、寝る迄の時間父親が遊び相手をする。医者なので、夜も帰れない忙しい時でも、食事にだけは戻り子供と遊ぶ事をする。母親まかせでなく父親の役割を果している事に感心させられた。

車で出掛けると、ベンジャミンは必ず「あの雲は何に見える？」と質問する。すると父親は運転しながら、「そうだね、ドラゴンに見えるよ」と答える。「ベンジャミンは？」と父親が云うと、「ダイナサウルス」とか、「ステゴザウルスが戦っている。」と恐竜に興味をもっている彼は答える。「祥子さんは？」とこちらにも質問が来る。「さてー」と私も何がしかの答えをする。これが一度や二度でなく何度もあった。

我々が幼稚園の子供と、庭で空の美しい時、雲を見ながらこのような会話をする。

いつももっと小さい時からこういう機会が多くあり、自然に創造する力が養われて行かれたら良いのに、と思う事があったので、この時はとてもうれしかった。

どうしてこの様になったのかを尋ねたら、「雲」という絵本がとても好きで、何度も読んでいるうち自分で創造する様になったとの事だった。

絵本も選ぶのは両親であるが、子供が興味を持ったものは、何度でも相手になり読んであげるのだが、それが少し違う。本に書いてある事をそのまま読んでいるのではなく、必ずお話にして語っているのである。

父親の考えている事、伝えたい事が絵本を通して子供に伝わっていくのである。

本も少し難しいものでも、絵が美しいとか、内容が良いと思えばどんどん与えている様であった。

動物に対する態度も、アメリカでは家族の一員である云う考えが強く、犬と猫が家の中で一緒に生活しているのだが、足をおちよっと踏みそうになっても、ごめんなさいと、動物に対して自然に云う事が出来る。

見ていると両親も、意識せずやはりそのように云っているのを何度か耳にした。

又、宗教的な要素がとても大きいと思う。生活の中にキリスト教が柱としてあり、感謝する気持ち、思いやりの気持ち、すべての考え方が宗教を元として、小さい時から身につけている。日曜日には家族で教会に行き、子供達は年齢別クラスに分かれ、友達と過す場があり、大人達は、聖書研究の後、礼拝に出席し、尊敬する牧師の説教を聞き、自分自身の心の勉強をする事が出来る。

そして家庭では、その考え方が子供にかえっていくのである。妹はまだ充分話せないのだが、父親と兄との行動を一部始終見ている。

兄が父親と何かしている時には、出る場はないのだが、少しのすきまを見つけて、必ず同じ事をする。そして彼女なりに満足したり、気に入らない事があると、大きわざして主張したりする。

子供達の態度、言葉使い、親にそっくりでおかしくなる様であった。方法は良いか悪いかは別として、この様に母親ばかりでなく、父親が子供とかかわっていることは、とても大切に思う。一生懸命生活している中でも、育てる事を大切に考えている様に感じた。

両親は、「大きくなったらお金の援助しか出来なくなる。小さ

い時には精神的なものを大切に育てていきたい」と話していた。私は園で父親達が、「子供の事は母親まかせで……」とか、「夜が遅いもので子供の事は良くわからない」と云っていた事が頭をかすめたものである。

又もう一つは、このように両親とのかかわりの中で身についたものを持って集まってくる子供達ひとりひとりと、どう私達がかかわって行ったら良いかが大切な事だと思つづく感じだったのである。

S君とのこと

Sは微細脳損傷群と云われる障害をもつ年中児である。年少(三歳)で入園した時は、多動で少しもじっとしている事がなく、物をさわっては走り回っていた。道路に出て行き、バキュームカーをながめたり、近所の家の階段を上ったり下りたり、言葉も単語程度が出て来るだけであった。

少しずつでも集団の中で変わっていつてくれる事を期待しながら見て行く事になったが、一年間クラスの中で、又園全体の子供達と行動しながら、ほんの少しずつだが変化していった様に見える。

年中に進級し、カバンをかける場所も担任も変わった時、Sはとまどいを見せた。

始めは、自分の場所はことばかりに、元のクラスにカバンを置き、そこで遊び、お弁当も年少と一緒に食べた。私達は少しも気にならず、Sのやりたいようにさせ、様子を見ていたのだが、母親はどうも気になるらしかった。そのうち朝泣くようになる。園にも来たがらなくなった。母親から様子を聞き、少しSとかかわってみようと思った。私は年長を担任しているが、母親とも良く話をしていたので、S自身は身近かに感じていくれた様でかわりやすい気がした。

「車にのらない？ S君」と声をかけた事から、毎日Sと一緒に行動するようになった。登園すると毎日私の所に来て、「車のろろ、押して、押して」と云う。私も押したり、引っぱったり、あきずに続いた。

ある日Sは、私の靴を指さして、「同じ」と云う。見るとSの私のと同じ靴なのである。私は偶然と思い、「あれ、同じね。どこで買ったの？」などとあまり気にもかけず、もう古くなって指先に穴があいていたので、そろそろ買い換えなくてはーと思う位だった。そうしているうち、Sは朝も調子良く登園して来るようになり、カバンは新しい場所に置き、お弁当だけは年少の部屋に

行つて食べる様になる。

私も新しい靴を買い、二足下駄箱に入れておくようになった。始めて新しい靴をはいて庭に出て行くと、子供達は「先生の靴新しくなったネ」等と云っていたが、Sはいつものまにか古い穴のあった靴を持って来て、「先生こっちはくの」と云ったのである。

私はハッとさせられずはきかえ、Sに悪い事をした様な気持ちになり、心の中であやまった。そうして新しい靴は、子供のいる間ははかれずに下駄箱に入っている事になり、捨てられるはずの靴が活躍することになった。Sはそうして車から砂場へ、砂場からブランコへと遊びを移しながら、次第に落ちついて行き、喜んで登園するようになる。

担任もSと出来るだけかわるよう声をかけ、年少の先生も前と同じように見て行く毎日だった。そのうち古い靴も自然に新しい靴に変わって行ったある日のこと、Sは私のそばに来て、足を出し私の足と並べる。見ると又同じ靴をはいている。私の方が驚いてしまった。今度は偶然とは思えない。母親に聞いてみると、「デパートでこれ買うって聞かないんですよ。先生のと同じだったのですね」そういうわけで、親子のように又同じ靴をはいている。Sも二学期には驚く程成長してくれた。座っている事も出来るようになり皆を驚かせた。それと同時に友達と遊べるようになって

た。それまでは一人でいるか、先生と一対一のかかわりしか出来なかった。しかし、友達とブランコをこいだり、話しながら手をつないで歩いたり、仲間として認められるようになった。

Sは私が今まで見て来た子供の中で一番多動で、変化して行く様子も遅くどうなる事かと思つて来た。このように、ちょっとした物や言葉を媒介としてかかわりを持つた時、気もちが通じる様になる。この様なかわりか、子供の成長には大切なのだらうと思つて。

T君とのこと

Tは年長児である。Tは二年保育で入園したのであるが、上目づかいで人を見るような、暗い感じのする子供で友達の中に入つて行くにも時間がかかる。入つてしまえば体格も良いし、とても活発な面も持っているので、発揮出来るのだが、そうなるまで、とても時間がかかる。そのTに変化があった。

母親が亡くなってしまったのである。一月に急に病気で倒れ、四月末に亡くなったのであるが、その間祖母の所に預けられた。

年中の三学期は全くお休みし、五月の連休の後、久しぶりに登園して来た。

顔を見ていると、本当にかわいそうになつてしまふのだが、子供の事を考えると出来るだけ強く頑張れる様になつてほしいと祈りつつ、私達の出来ることは、思う存分生活出来る園での場を作つてあげること、気もちを少しでもわかつてあげる事だと思ひ、様子を見ていた。

ある日の昼食後、すもうをしていた時である。始めは仲間に入りたくても横で見ているのだが、ちょっとした誘いの言葉で仲間に入つて来た。タイミング良く、とても云うのであろうか。すると驚くばかりに力を出し、汗を流して何度もくづつかつて来る。

こちら驚きながらも真剣に、時間も忘れてすもうに熱中した。最後は両方共、マットにひっくり返るほど力を出しきり、何だかすっきりした感じだった。

Tも今迄のもやもやが吹き飛んで心の中がすっきりしたような笑顔でいた。

次の日から別人のようになったわけではない。やはり誘つてもすぐには入つて来ない事もある。でもあのすもうで何だかTのことがわかる気がして、誘つて、来なくても心配でなくなったのだ。

ある時絵の具の水を床にこぼして、水びたしになった。「あれ、大変！」ときげぶ私の所にTはだまって雑巾を持ってかけつけ、

バケツに絞つては又ふいて、と一生懸命やってくれた。まわりの子供達も、こぼした本人ですら、まだ何もせず立っている時であった。

私は感激してしまい、ますます認めてあげられるようになったのだらう。T君は大丈夫と云う確信のようなものが出来たのである。

このように、どこにでもある小さな事が、私にとってこの仕事を続けさせ、おもしろいものとしている様に思う。

いろいろな家庭環境に育つて来た子供達、親といろいろなかわり方をして来た子供達、みんな違うけれども、一人一人に何かの型でかわり、心が通じあえたらうれいと思う。今年も又、悩み、考え、喜びを味わいながらひとりひとりとのかわりを大切に生活していきたいと思う。

(神奈川・松ヶ丘幼稚園)

